

論 説

帰りなん，いざ豊穡の大地と海に

——「平和なエコエコノミー」の創造・再論——

藤 岡 惇

「帰りなん，いざ
田園まさに燕（あ）れなんとす
なんぞ帰らざる」（陶 淵明「帰去来の辞」）
「日本は 東海に張られし一本の弦 平和の楽を高く奏でよ」
（結城哀草，1953年）

1. 「自然のミレニアム」にむけて

「……近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於いて論じたい。世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。自我の意識は個人から集団・社会・宇宙と次第に進化する。……正しく強く生きるとは，銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである。」

（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』）

キリスト誕生から最初の千年紀（ミレニアム）の間，とくに欧州では人間の生命と能力とは，全能の人格神に帰属しているとみなされていました。人間は，いわば外部の全能者にかしづく下僕となりましたので，「神のミレニアム」といってよい千年間でした。

第2のミレニアムに入ると，「神の専制」への反発から人間復興運動がおこり，しだいに人間が神にとってかわるようになりました。人間は自らを自然環境の外におき，自然を支配と征服の対象だと考えるようになったのです。こう

して第2の千年紀は、しだいに「人間のミレニアム」という色彩を濃くしていきましました。自己（自分の脳）を中心として、世界が回っているという観念的な天動説のような考えに染まるようにもなりました。その結果は、自我のエゴ化と精神病理の蔓延、核戦争、地球環境の危機でした。

第3のミレニアムの課題とは何でしょうか。あらゆるイノチ（生命）が輝かないかぎりには人間のイノチも輝けない世紀、「万物の霊長」にふさわしく、地球環境全体をケアする義務を人間が引き受ける世紀になることだと、私は考えています。ジョン・レノン、『イマジン』という歌を作曲し、「想像してごらん。神様なんていないってことを。そして皆が平和に暮らしていることを」と歌いましたが、「神のミレニアム」と「人間のミレニアム」双方の弱点を補正した「自然のミレニアム」への転換が望まれているのです。

「自然順応型の経済と社会」、「自然順応型の心身をもつ野性の人」をどう創ったらよいのでしょうか。次の4つの問題を解決していくことだと思います。

第1に、環境破壊による人類の緩慢な大量死を避けることです。今日の人類は、二酸化炭素を炭素換算で年間72億トン排出していますが、そのうち、森林や海洋など自然が吸収してくれるのは31億トン程度。残る41億トンは大気中に滞留し、温暖化を促進しています。気候を安定させようとすると、年間排出量を30億トン以下に下げなければなりません。2050年までに排出量を半分にすることが最低限の責務となるでしょう。ただし過去百年の間に大量の二酸化炭素を排出してきた先進国が、まず率先して排出量の1／3化を達成し、発展途上国を排出量の大幅減にいざなっていくほかないでしょう。

ただし発展途上世界の絶対的な貧困と人口増を考えると、地球上で生み出す富の総量については、2倍程度に増やす必要があるでしょう。二酸化炭素の排出量を半分にしながら富の生産量を2倍にするには、化石エネルギーあたりの富の生産性を4倍に引き上げる必要があります。先進国のばあい、より高い目標——化石エネルギーあたりの生産性のほうを6—8倍に引き上げるという目標を掲げ、率先して挑戦していくことが求められます。労働の生産性の安易な上昇は大量の失業者を生み出すだけ。「人間を失業させるのではなく、エネル

ギーのほうを失業させる」エコ産業革命が実現できるかどうかには人類の未来がかかっているのです¹⁾。

そのためには、大量のエネルギーが必要な「モノ」の生産を減らし、エネルギーを余り使わずに生産できる「サービス財」の比率を高めていくことも大切となるでしょう。モノの豊かさの追求はほどほどにして、コト（関係）の豊かさ、ヒトの豊かさ、自然界のイノチの豊かさ、働きのいい自由時間の豊かさの方を追求する。「おいしいモノを食べたい」から「おいしくモノを食べたい」への転換が必要となるでしょう。

第2に、無差別のテロ、これにたいする国家テロや戦争の応酬といった、憎悪と暴力の悪循環を避けるという課題です。日本海（東海）を取り囲むかたちで日本・韓国だけですでに70基を超える原子力発電所が操業しています。発電コストを下げるためにチェルノブイリ級を凌駕する超大型の原発が多いのが特徴です。もし米国軍と北朝鮮軍とが戦端を開けば、超大型原発の炎上は避けられないし、すさまじい破局となることは明らかでしょう。人類が戦争を絶滅しないかぎり、戦争のほう人類を絶滅させてしまう——そんな時代が今も続いています。

第3に、国境を越えたマネーの暴走が貧富の格差を拡大し、「百年に一度」という金融恐慌を引き起こしつつありますが、これにどうストップをかけるかという問題です。マネー移動のグローバル化のなかで、労働・人権・環境基準の最底辺への切り下げ競争が激化し、世界では労働人口の1／3にあたる10億人が失業ないし半失業状態になっています²⁾。

日本でも、生活への不安が消費不況を激しくし、新たな紛争の火種となっています。若者や失業者に働きのいいのある仕事を保障したり、市民としての尊厳を保障する生存保障制度を整えないかぎり、消費不足におちいり、デフレ不況の解決は難しいでしょう。

第4に、家族や地域社会の絆の解体が進み、日本は「無縁社会」となりつつあるとされていますが、家族や地域社会の絆をどう結びなおしたらよいのかという問題です。じっさい独居老人が増えています。親しい人に看取られること

なく死んでいく人が年間10万人、引き取り手のない遺体についていえば、年間3万2千人に達しています。他面では、少子化と教育の市場化が進み、社会関係を取り結ぶのが苦手な人、自殺・自傷に走る人、神経過敏症やうつ病の人、閉じこもりやストーカーが増えています。毎年交通事故でなくなる人の4倍にあたる3万人近くの人々が自殺しています。人の平均寿命を70年としますと、一生の間に200万人もの人が自らのイノチを断つという異常な事態です。

大地と自然から人が切り離された近代社会では、どこでも神経過敏症とうつ病、アトピー性皮膚炎・潰瘍性大腸炎などの免疫不全症がまん延³⁾し、治療策として「ヨガ」が大流行です。「ヨガ」とは、奔馬のように暴走する「ココロ」を体と自然につなぎとめるための技法のことですが、個人的な自衛策では限界があります。個人の尊厳を前提にしたうえで、脳を体に埋め戻し、心身を地域の文化とエコロジー（生態系）の秩序に埋め込み、根付かせ、家族と地域社会の絆を結びなおし、「健康な社会」を再建していくには、どうしたらよいのか。このことを世界中の人々が考えています⁴⁾。

ただし人間とは弱者。貧しい社会になればなるだけ、道徳の説教だけでは世の中は変わりません。個人的な自衛措置には一定の効果はありますが、やはり限界があります。「そうしたほうが得する」というしくみ、いわば「徳が得になるような経済システム」を形成することが必要です。経済学の役割は重大ですね。

まずは、そもそも「経済」とは何であるのか。どうしてこのような問題が生まれてきたのかを考えてみたいと思います。

2. 自然のなかから社会が生まれた

「昼となく夜となく 私たちの血管を流れる同じ生命の流れが、世界をつらぬいて流れ、リズムカルに鼓動をうちながら、躍動している。その同じ生命が……無数の草の葉のなかに飲びとして萌え出で、木の葉や花々のざわめく波となってくだける。

……いまこの刹那にも、幾世代の生命の鼓動が、わたしの血のなかに脈打っているという思いから、わたしの誇りは湧きおこる。」
 （ラビンドラナート・タゴール『ギタンジャリ』69、森本達雄訳）
 「…私たちが、[万物の霊長たるにふさわしい] 雅量をもつようになるとき、…私たちには…『高貴な身分には義務が伴う』ことを片時も忘れない者のもつ威厳が回復されるでしょう。」
 （E・F・シューマーハー『スモール イズ ビューティフル』）

宇宙の創生と進化

137億年前のビッグバン〔大爆発〕とともに、宇宙は、極微の世界から生まれ、猛烈なスピードで膨張を始め、冷えていきました。核反応のような極微の世界と、宇宙のような極大の世界とは、ビッグバンの時点では区別がなく、融合していました。始原の時点では、極微の世界と極大の世界とは同じであり、一つだったのです。その後137億年をかけて、極微の世界と極大の世界とは分離の歩みを続けていきます。とはいえ極微の世界と極大の世界のあいだには、⁵⁾なお多くの類似性が残されているのはそのためです。

ビッグバン（宇宙誕生）から3分後にはクォークが結合した原子核が形成され、38万年後には、もっとも単純な原子（元素）である水素とヘリウムが形成されましたが、それ以外の元素は存在していませんでした。原子核同士が核融合反応を起こして、もっと複雑な元素をつくりだすためには、大変な高熱が必要となるからです。

ビッグバンから2—3億年たった頃に、宇宙のあちこちで、水素とヘリウムのガス雲の濃いところに、「ダークマター」の重力に引き寄せられて、第1世代の星たち——水素とヘリウムからなる巨大なガス星が誕生します。ガス星の内部で原子炉（核融合反応炉）の火が灯り、自ら「青い巨星」となって、暗闇であった宇宙を照らしだすようになります。第一世代の星は、中心部で進む核融合反応のおかげで水素・ヘリウム以外の炭素・シリコン（珪素）といった重い元素を生み出しますが、新たな元素の形成は鉄が限界でした。鉄より重い元素のばあいは、自力では核融合反応を起こせないからです。⁶⁾一般に第一世代の

星は短命で、数百万年後には、中心部の核融合反応の産物というべき重い元素を宇宙空間に放出して一生を終えることになります。

太陽よりも8倍以上重い質量をもつ星の最後を飾る「超新星爆発」が起こった時に、鉄よりも重い元素は誕生したと、天文学者は考えています。超新星爆発の際に生じる大量の中性子が鉄などの元素と衝突し、金、銀、銅、ウラニウムといったもっと重い元素を生み出し、宇宙全域に拡散させていきます。⁷⁾超新星爆発直後の周辺空間に現れる元素の成分比は、人体を形づくる元素の成分比とほぼ同じだといわれます。爆発直後の周辺空間の元素を集め、収縮させていくと人体ができるそうです。不思議な符合だと思いませんか。⁸⁾

宇宙誕生から5億年ほどがたった頃、最初の原始銀河が生まれてきました。物質は、原子から分子へ、さらに複雑な分子化合物へと発展していきませんが、これらの高分子を豊富に含む分子ガス雲が集まる空間が、原始銀河のそこかしこに生まれてきます。分子ガス雲のなかには、水や一酸化炭素、エチルアルコール、さらには地球上では形成できないような高分子化合物さえ生まれるようになります。⁹⁾

ともあれこのようなかたちで幾度となく繰り返される「宇宙の陣痛」のなかから、鉄よりも重い元素が生まれ、化学反応が進み、原子の結合体たる分子の集まる分子ガス雲が生まれ、さらにはイノチの材料となる分子の有機的結合体（有機物質）が生まれることになります。私たちの体は、もとをたどれば、星くず（スター・ダスト）からできていたのです。¹⁰⁾

宇宙誕生から87億年が経過した、今から50億年前に、第3世代、ないし第4世代の天体と目される私たちの太陽が誕生します。今から46億年前に地球が生まれ、36億年近くまえになると、地球の深海のなかで最初の生命体（イノチ）が生まれてきました。動物界・植物界に分かれる前の、いわばイノチの母体となった単細胞微生物たちの群です。原始の海の「生命スープ」の成分は、人間の胎児が浮かぶ母体の羊水の成分とほぼ同じというもの、不思議な符合です。¹¹⁾

さて生命誕生直後から26億年の間は、細胞分裂というかたちでの無性生殖が、生命の繁殖の唯一の方法でした。そこでは個体の死はありません。雄と雌とが

互いの DNA（遺伝子コード）を交じり合わせ、子を生み出すという有性生殖がはじまって、個体の死が始まりました。高等生物たちは、セックスの喜びを味わう代償として、死の恐怖に直面するようになったのです。¹²⁾

絶妙な生命維持装置を備えた「いのちの惑星」

地球の表面を大気がおおっていますが、雲が生まれ、雨が降り、生物が生息できる対流圏というのは地表から11キロメートル程度の厚みしかありません。地球を「りんご」にたとえますと、生物が活動できる対流圏というのは、りんごの表皮よりもずっと薄い空間なのです。¹³⁾

地球上の原始大気というのは、ほとんどが二酸化炭素からなっていたようです。気温は今よりはるかに高く、太陽からは有害な紫外線が容赦なくふりそぐ苛烈な世界でした。きっと現在の金星のような赤い世界だったのでしょう。陸地の上に土はあっても、土中の微生物はゼロという荒涼とした世界。イノチが発生した後も、初期の段階ではイノチは、紫外線の届かない深い海のなかでしか生きられなかったのは、そのためです。

とはいえ海中植物の活発な光合成作用のおかげで、海に吸収された二酸化炭素は炭素と酸素に分解され、炭素は石灰岩となって海底に沈みこみ、酸素を大気中に放出します。大気中の酸素濃度が高まると、酸素の一部は紫外線と反応してオゾン（O₃）となり、地上15キロから50キロメートルのところにオゾン層を形成していきます。太陽からやってくる有害な紫外線をオゾン層のところでシャットアウトするしくみが生まれてきたのです。

こうして生物が陸に上っても生きられる環境が整いました。陸上でも光合成作用が進むようになると、大気中の二酸化炭素濃度はいっそう低下し、気温も下ります。それにつれて地上でも植物の繁茂が進み、光合成作用が一層促進され、二酸化炭素濃度はついに0.04%まで下がり、酸素濃度21%という生物にとって理想的な環境が作り出されました。深い海、光合成、酸素、オゾン層という絶妙な生命維持装置に支えられることで、「イノチの惑星——青く、多彩で美しい地球」が生み出され、今日まで維持されてきたわけです。¹⁴⁾

イノチの尊厳，人間の尊厳

それはともかく、有性生殖の積み重ねのなかで、子供に引き継がれる DNA（細胞のなかの遺伝子コードを伝える糸状の物質）は高度で複雑なものになり、その精華として人類が誕生します。生物の進化の歩みを手で表したばあい、その最先端の指先のところに、「自然がついに自分自身の意識にまで到達している存在」が生み出されたのです。

一人の人間のなかに60兆の細胞がすばらしい協同の活動をして、人間活動を支えています。よく生物学者は、「人間とは36億年の DNA だ」と述べますが、¹⁵⁾一人のなかに含まれる DNA の総延長は、1080億キロ——地球と太陽を360回往復する長さになるといいます。¹⁶⁾ビッグバン直後の状態から、宇宙の物質系は、ここまで進化をとげたのです。

たしかにヒトとは、自然の一部、「多少コントロールが効く自然」にすぎないでしょう。胎児のときや植物人間になったばあい、脳がコントロールできる肉体部分はわずかです。成人期になっても、脳の指示どおりに動く筋肉（随意筋）は、手足などの体の表面の筋に限られ、心臓や内臓器官まで動かすことはできません。とはいえヒトは、身体・社会・自然を認識し、より美しい姿に変える能力と可能性をもった存在でもあります。

イノチはなぜ尊いのでしょうか。わけてもヒトのイノチは、なぜ尊いのでしょうか。60兆の細胞が、1千億キロ余の DNA に導かれて、自らの力で宇宙の最高の精華としての光を発しているからではないのでしょうか。137億年の歳月をかけて、宇宙自身が幾度とない陣痛の苦しみに耐え、腹を痛めて、ついに自らの姿を捉える眼と耳をつくりだした——まさにその眼や耳にあたる部分、「宇宙が生み出した宇宙の自己認識装置」こそが、私たちを含む高等生物の位置と価値と義務=使命なのではないでしょうか。¹⁷⁾

指先を切り落とす際には、痛いという感覚が生まれますね。戦争とは人指し指と中指とが争い、傷つけあっているようなもの。たとえ敵兵であっても心が通い合った瞬間、殺すことができなくなります。現代の若者は音楽やインターネットのおかげで、国境の壁を越えて、共感のネットワークをめぐらしていま

すので、いざ戦場に駆り出されたばあい、敵兵はどうしても野獣とも悪魔とも思えない。イラク・アフガン戦争に駆り出された米国兵士のなかから、敵を殺そうとしても殺すことができない羽目に陥り、精神病に追い込まれていく兵士が大量に生まれてきたのは、そのためなのです。

自然からの社会の枝分かれ

およそ200—370万年前頃に、私たちの祖先（アフール猿人など）は、生活の拠点を樹上から草原に移し、直立歩行を本格化させました。直立歩行のおかげで手と足の機能を分けることができ、手を操った複雑な仕事ができるようになりました。ヒトの祖先は250万年前ころに左右の手を使って石器を作り始め、100万年前ころには火を使いこなすようになり、30万年前になると、自由に動く左右の手とそれを動かす左右の脳、原始的な言語、原始的な宗教を獲得し、死者を葬り、神や祖先と交信するために絵を描き、音楽を奏でるようになったといわれます¹⁸⁾。

直立歩行のおかげで、脳が重くなっても、背骨で支えることができるようになり、脳が急激に肥大化するようになりました。じっさい200万年前から130万年前までの70万年の間に、脳の大きさは一挙に2.5倍に増加し、知的な活動の発展を支えてきたわけです。

ただし直立歩行に伴う頭脳の肥大化は、メスの出産と子育て（次世代の再生産）に新たな困難を作り出しました。メスの骨盤が変化し、産道が扁平となり、頭部の肥大化した胎児を通すことが難しくなったのです。その対策として、メスがとったのは、赤ん坊を未熟児のままで産み落とすことでした。未熟児を生んだ母子の生活を支えるために、餌を集めてくるオスの協力が不可欠となりました。

オスの協力を調達するために、メスが採用したのは、ボノボ（ピグミー・チンパンジー）と同様の「ラブ&ピース戦略」でした。発情期以外の時期でも性交ができるようにメスは体を変化させ、子供が自立するまでは、オスと安定的な生殖・子育て共同体（家族関係）を取り結ぶようになります。樹上から草原

に活動の場を移しても、猛獣の餌食とならずにすむように協力のしくみを作っただけでなく、未熟児の子育てを担う情愛と性愛に満ちた家族関係を作りだしたわけです。200万年ほど前に私たちの祖先は、家族や社会の協力関係を作り出すことによって、自然界の猛威から生き残ろうとする選択を行い、ここに自然界から人間社会が枝分かれする歩みが始まりました。²⁰⁾

それとともに自己の土台である自然を自己（＝脳）の外側に位置する「環境」であると誤認する時代が幕を開くことになりました。

自然観のコペルニクスの転換を

「事実は真実の敵である」という言葉があります。スペインの文豪セルバンテスがドンキホーテに語らせた言葉ですが、ヒトの脳を基軸にして外界を観察するかぎり、事実としてはヒトと地球の周りを、太陽や星が周回しているように見えます。事実認識としては天動説が正しい。しかし地球とヒトが太陽の外周を回っているのが真実のはず。真実とは逆の姿をとって、事実の方が見えてしまうわけです。

コペルニクスの時代から500年をへて今日、同様の錯誤が、いっそう深刻な姿をとって現れています。ヒトの脳を基軸とすることによって、自然を「エコロジー」ではなく「環境」として捉える自然観が台頭し、支配的になってきたからです。

「環境」とは、英語で言うと“environment”という単語の翻訳です。environment とは何か。語源をたどりますと、“viron”（牧場を囲む木の柵を意味するフランス語）に行き着きます。つまり「人間の生存に必要な外圍条件の総体」というのが、「環境」という意味なのです。土星にたとえますと、ヒトの脳や社会というのが土星の本体であり、自然というのは土星を外（辺境）から囲んでいる「環」に見えてしまう。

自然を「環境」と見るのは、コペルニクス流にいうと、まさに唯脳論（究極の観念論）に視点にたった「天動説」です。なぜこのような「天動説」的自然観が台頭するに至ったのか。今日の支配的哲学である、脳を中心におき、全て

を分けていくルネ・デ・カルト的思考の必然的産物だからです。

どうしたらデ・カルト的思考を克服し、「生きる」とは「イノチの移し替え」であると観じ、「イノチが私を生き、自然体に発達させている」と悟ることができるのでしょうか。そのためには「殺される牛や鶏の顔に自分の親の面影を見る」訓練をし、「大地を殺すことは自分を殺すこと」と観じ、「毒死した万物の声に身悶える」（石牟礼道子）感性と体験を育むことを、経済教育の原点に定置する必要があると思います²¹⁾。そうすると「チッソは私であった」（緒方正人）、「東電は私であった」という考えが生まれるし、「日本軍も原爆を開発していたら、起死回生の手段として、米国に投下しなかっただろうか」という問いかけが自然と出てくる。伊藤若冲さんの「野菜涅槃図」ではないですが、「生命平和」を支えるイノチの曼荼羅絵、「至らなさの自覚に発する慈悲」の世界が浮かんでくると思います。

皮相な「人種主義」の誤り

それはともあれ20万年前に現生人類（ホモ・サピエンス）が現れますと、飛躍の時期が始まりました。直立歩行と社会的結集力を背景にして、アイデアを交換し、新しいアイデアを生み出す時代、人間活動の知的なエネルギーが格段に発展する時代が始まります。そして、このパワーを背景として、現生人類が現れ、約5—6万年前にアフリカ大陸を出発し、地球の各地に拡散していきました。乾燥地を、氷の上を歩き、ついに南アメリカ大陸の南端にまでたどり着いたのが1万年前だとされています。彼らは多様な自然環境に自らの肉体の姿を適応させ、知恵をしばって最適の衣食住の様式を練り上げていきます。たとえば極北では、体表から熱を逃げていくために、体毛が発達し、皮下脂肪がたまり、まぶたは一重となりました。顔面からの熱の放出を減らすために、鼻が低く平らな顔となり、砂嵐の多い地域では、眼に砂が入りにくいように細目の人が増えました。

今から5—6万年前のアフリカを出発する時には、ほぼ等質のヒトの集団だったのですが、自然を活用し自然に溶け込み、その一部となる訓練を積むなか

で、わずか5—6万年という短期の間に、肌の色、骨格、骨相、体毛の点で、多様な民族の集団に現代人は、分化をとげていったわけ²²⁾です。

ヒトの外見だけをみて、白人は黒人よりも優秀、白人のなかでもゲルマン系やアングロサクソン系が一番優秀だとか、アジア系のなかでは日本人は朝鮮人よりも優秀だと主張する「人種主義者」が今でも残っています。しかし5—6万年前は、同一の人であったわけですから、ヒトとしての本性・能力は基本的に同一です。DNAを解析しても、どこに住んでいるヒト（民族）であっても、DNAの配列の99.9%以上が同じです（ヒトとチンパンジーとの間では1.2%の違いがある）。

自動車メーカーも、同じ性能の自動車であっても、表面の色や、アクセサリや車のデザインを変えた異なる車種の車を売り出しますね。外見だけを変えただけで、車の基本的性能は皆同じです。「人種」といわれるのも、同じようなもの。人種主義の考えというのは、ヒトの表層だけを見て、本質と誤認し、ヒトの値打ちを裁断しようとする愚かな主張です。

3. 社会のなかから市場経済が生まれた

「経済のない道徳は寝言である

しかし道徳のない経済は犯罪である」²³⁾（二宮尊徳）

ヒトの意識を通して生み出される政治と文化の営みの拡大

自然から社会が枝分かれしたとはいえ、200万年前から1万年前までの間は、経済活動の原型ともいえるモノの採取と生産（モノづくり）の活動も、ヒト（後継者）づくりも、コト（政治）づくりの活動も、より良い生き方を求めて祖先や神と交信する文化の活動も、社会活動のなかに渾然一体となって溶け込んでいる時代でした。

ただしレーニンが鋭く指摘したように、モノの採取と加工・生産（モノづくり）とヒトづくり（生殖と子育て）とは、動物世界と共通しています。動物とし

て命をつなぎ、育む活動であり、考える前に行動している領域です。それにたいして、モノとヒトの管理と防衛のために形成するコトづくり（政治）やよりよい生き方を求めて形作る文化の領域は、ヒトの意識の産物であり、ヒトの意識のありかたによって大きく変化します。

社会からの政治・文化・経済の枝分かれ

1 万年ほど前の農業＝定住革命をきっかけとして、社会のなかで最初の大分裂が発生します。職業的な軍人とプロの官僚が生まれ、土地と資源とを求めて戦争という組織的な殺戮戦が始まり、国家が生まれ、私有財産と都市が生まれ、政治—コトづくりの世界の枝分れが始まりました。ほぼ同時期に、文字が発明され、文化活動（学問・芸術・宗教・舞踏・スポーツ）の先端部分を専門的知識人（文化人）たちが担うようになり、文化が社会から枝分かれする動きが始まります。²⁴⁾

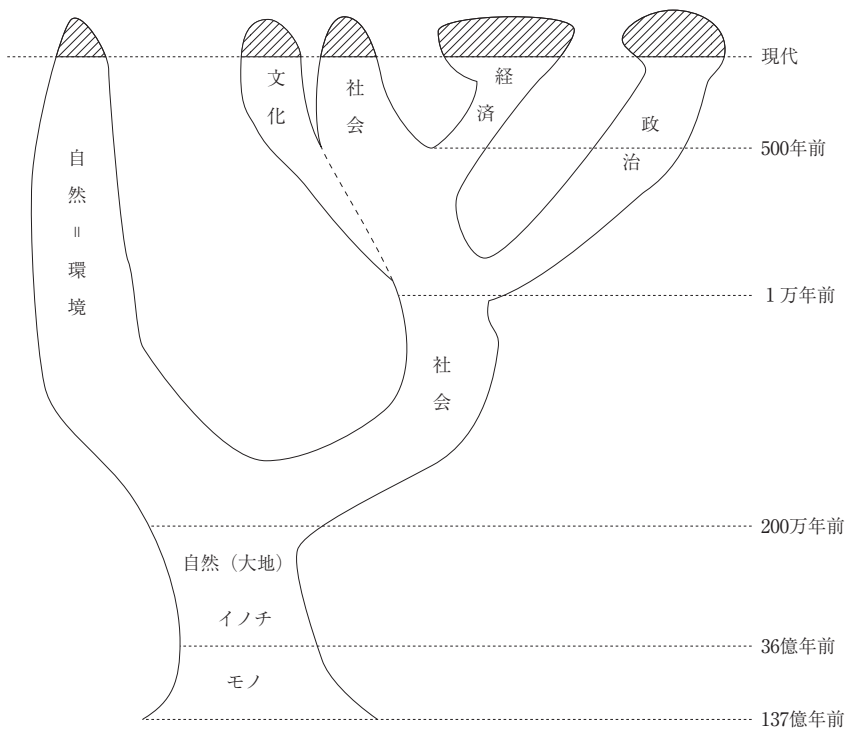
1 万年前を転換点として、分離と分業が社会進歩の原動力となる時代、都市と国家とが生まれ、文字が発明され、職業が専門化する「産業主義」の時代がはじまったわけです。

ただしほとんどのヒトはまだ土地から分離せず、経済活動のほとんどは自給自足のもとで営まれ、経済活動の大半はいまだ社会のなかに溶け込み、眠り込んでいた状態でした。農作業の重労働も家族や隣組同士で助け合い、神様に豊作を祈願し、田植え歌を歌い、秋祭りには収穫物を神様に奉納するなど、労働は、文化や宗教活動と渾然一体となっていました。

500年ほど前——コロンブスの新世界発見の頃から、社会から第2の枝分かれというべき事態が生まれ、「モノづくりと分配」（経済）の領域が自立する動きが本格化します。そして200年前の頃に、道具のかわりに機械が採用される「産業革命の時代」が始まり、カール・ポラニーが描いたように、経済活動は自己調整的な「市場経済」という独自の論理で動くようになりまし²⁵⁾た。

政治（国家）、文化（僧院・工房・学校）と経済（企業・市場）とが枝分かれた後の「社会」には、消費（人づくり）と睡眠・余暇の活動しか残りませんで

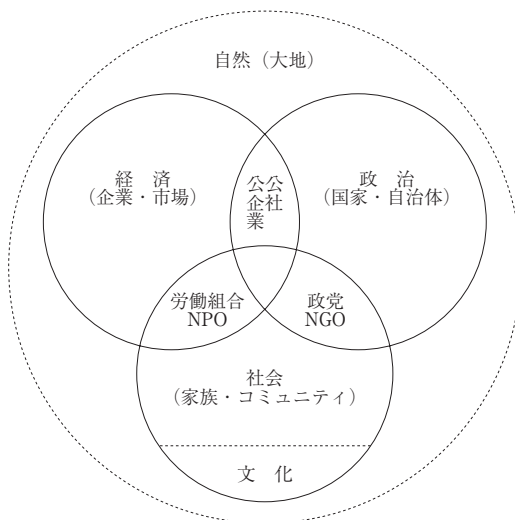
図-1 人間社会の系統樹



した。マネーを稼げない「影のような仕事」の場に、社会は変質し、格下げされ、家事の仕事やヒトのケア（老親の介護や子供の世話）の仕事は、もっぱら女性が担当するようになりました。

このような枝分かれ（分化）のプロセスを示したのが、図-1の人間社会の系統樹²⁶⁾です。自然・社会・経済・政治・文化というファクターは共通した根をもっているにもかかわらず、現代では相互に無関係なファクターであるかのように分立しあっていることがわかります。大学のなかで勢力争いをしている学部間の関係とそっくりですね。

図-2 人間活動の4領域の相関
——図-1を上から見たばあい——



自然・経済・政治・社会・文化とは何か

これまで人間社会を歴史の流れのなかで見してきましたが、図-1の歴史的な系統樹を現在の時点に立って、上から眺めてみましょう。そうすると現代人の24時間の生活は、「経済」、「政治」、「社会」、「文化」という4つの領域から構成され、生活の土台には、「自然」（大地）が位置していることがわかります（図-2参照）²⁷⁾。

「自然」（大地）とは、万物を進化させ、イノチを生み出す場のことです。ヒトというのは、葉っぱ一枚・細菌一つ、自分の力で生み出すことはできません。できることは自然進化の産物であるイノチを加工し、変形させるくらいのこと。下手に手を加えると、狂牛病や花粉症、氷河の融解などを招きますので、慎重な対処が求められているのはご存知のとおりです。

「経済」とは、モノを採取し、モノを加工し、作り出し、分配する場です。現代では、市場と企業が主な担い手となり、もうけ追求原理が支配しています。

「政治」とは、モノ・ヒトの管理・防衛のために、コト（関係・ルール）を生

み出し、調整する場です。政府や自治体が担い手となり、公共性の原理にもとづく運営が求められています。

必然性の領域

「経済」、および「政治」（とくに軍事）という領域は、凶暴な自然や敵兵をあいてとして、がぶりと組み合った真剣勝負の世界。相手の動きにあわせてこちらの動きも決まってくるという意味で、「必然性」が貫きやすい世界です。その証拠にどの民族も、どの文明も、農具・運搬手段や武器については、似かよったものしか生み出せていません。真剣勝負の世界では、「遊び」や「空想」といった観念の自由な展開を許すゆとりがないからです。経済や軍事の領域の人間行動は予測がつきやすい。ヒトを自由意思のない「モノ」であるかのように扱い、微分・積分の方程式で表示しても、大過ないことが多いのはそのためです。

自由の領域

これにたいして、政治と経済とが枝分かれした後の「社会」というのは、モノの消費を介してヒトを生み出し、社会の後継者を育てる場に縮小してしまいました。この領域は、「ヒトのイノチを生み出す」女性の「天職」の場とされ、女性は、家庭内に閉じ込められ、日の当たらない「シャドーワーク」を強いられてきました。しかし真剣勝負の仕事が終わった後のモノの享受＝消費の場であることから、「遊びの余地」が大きく、民族ごとに多様・多彩な活動を展開して来ました。ヒトの社会・文化活動を数式で表現したり、予測したりするのが難しいのは、そのためです。

真剣勝負の終わった時間帯にヒトは、己の人生体験を反省し、より良い生き方を探求し、その成果を表現し、同胞と交流してきました。この営みのことを特に「文化」と呼んでいます。「神のミレニアム」の時代には、文化活動とは、より良い生き方を探求・表現し、これを神に奉納し、神の啓示を仰ぐ営みでした。「人間のミレニアム」に移るとともに、文化の世俗化・専門化が進み、「社

会」領域からの枝分かれが、いっそう促進されました。元来は外界を観察・理解し、教訓を得るという同質の行為であったものが、真実を探求し、生活を科学化するための営みは学問に、美を探求し、生活を芸術化するための営みは文化・芸術に、善（正義・公正）を探求し、生活を倫理化するための営みは宗教・道徳へ、心象風景を表現する活動は舞踏やスポーツへというように分けられ、分断されることで、まとまりを失い、精彩を欠き、生命力を枯らしていくことになりました。²⁸⁾

以上をまとめますと、「自然」とは万物のイノチづくりの場、「経済」とはモノづくり（と分配）の場、「政治」とはコトづくりの場、「社会」とはヒトづくりの場、「文化」とはヒトの生き方（志・目標）づくりの場だと定義することができます。

異なる価値の追求

フランス革命の際に、フランス人たちは、革命を導く3つの価値として、「自由・平等・友愛」を強調しました。経済とは「自由」原理の支配する世界、政治とは「平等」原理の支配する世界、社会（枝分かれ後の）は、「友愛」（無償のボランティア）原理が支配する世界になるべきだと考えられたのです。そのように考えると、文化は「真美善」、とりわけ「美」の原理が支配する世界、自然（大地）は「多様性」原理が支配する世界になるべきなのでしょう。19世紀が三色旗の時代だったとすれば、21世紀は「自由・平等・友愛・美・多様性」の五色旗の時代となるべきなのかもしれません。

領域が異なれば、追求すべき価値もまた変わってきます。友愛原理が支配すべき「社会」領域に自由な利得追求という経済界の論理がもちこまれますと、出生率が低下したり、子どもが健やかに成長できない、後継者が育たないといった不都合が生まれます。政治の世界を経済の論理で引きまわしますと、利権と汚職がはびこり、健全な政治活動は機能不全に陥るでしょう。

出産と子育てという社会的価値実現のための行動を、あたかも「教育投資」という経済的価値実現の行動であるかのように新婚の夫婦に思い込ませますと、

子供を産み育てる活動は経済的に割にあわないと観念され、出産率が下がっていくのは避けられません。

政治運動と経済活動との違い

政治的価値にもとづく運動を経済的価値にもとづく運動に変えてしまうと、どんなに奇妙なことがおこるかについて、米国の経営学者が卓抜なたとえ話を使って、説明しています。「第一次世界大戦後、ユダヤ人排斥の空気の強い米国南部の小さな町に、一人のユダヤ人が小さな洋服仕立屋を開いた。すると嫌がらせをするためにボロ服をまとった少年たちが店先に立って、『ユダヤ人！ユダヤ人！』と彼を野次るようになった。困った洋服仕立屋は一計を案じ、『私をユダヤ人と呼ぶ少年には10セント硬貨を与えることにしよう』と言って、少年たち一人ずつに硬貨を与えた。戦利品に大喜びした少年たちは、次の日もやってきて、『ユダヤ人！ユダヤ人！』と野次りはじめたので、彼は『今日は5セント硬貨しかあげられない』と言って、再び少年たちに硬貨を与えた。その次の日も少年たちがやってきて、また野次ったので、『これが精一杯だ』と言って今度は1セント硬貨を与えた。すると少年たちは、2日前の10分の1の額に減ったことに文句を言い、『それじゃあ、あんまりだ』と言って、もう二度と来なく²⁹⁾」なりましたと。

元来、政治的価値の実現のために白人の貧しい少年たちの始めた運動を経済的価値のための運動だと錯覚させることで、ユダヤ商人は少年たちを煙にまき、見事に撃退したわけです。

人間活動を自動車にたとえると

人間活動を一台の自動車にたとえてみるとどうなるか。「経済」はエンジン、「政治」はハンドル、「社会」はブレーキ、「文化」はミラーやカーナビ装置にあたります。さしずめ「自然」（大地）は自動車を走らせる道路だといってよいでしょう。エンジン部分（狭い経済の領域）だけに視野を局限していると、自動車の全体的な姿も道路も見えなくなります。乗客たちの団結をはかるために

自動車の目的地をどこに定めたらよいのかといった問題、走行中の自動車に不具合が生じた場合、どこを調べ、どこを修繕したらよいのかといった問題を解くには、エンジン部門の専門家の手に余ります。他方では、経済以外の4つのファクター（政治・社会・文化・自然）との関連において考えないことには、エンジン部門の改良もまた、できない相談となります。

4. 資本主義——逆三角形型社会の形成の型と矛盾

歴史発展の法則的把握のかぎ——生産力と生産関係

「経済」という領域は、凶暴な自然をあいてとして、がぶりと組み合った真剣勝負の世界であり、「必然性」が貫きやすい世界だということはすでに述べてきました。自然を改造する力のことを「生産力」と呼びます。自然の猛威のなかで生き延び、生産力を少しでも高めるために、ヒトは生産のための社会関係（生産関係）を必死になって変えてきました。

社会の変容を法則的にとらえるには、生産力と生産関係を軸に考察するのがよいとして、科学的社会主義の祖たるカール・マルクスはこう書いています。

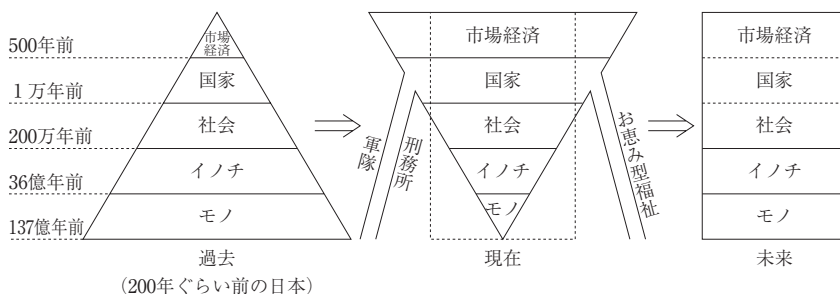
「人間は、彼らの生活の社会的生産において、……彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入り込む。……社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、……既存の生産諸関係と……矛盾するようになる。……そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎が変化するにつれて、巨大な上部構造の全体が徐々に、あるいは急激にくつがえる」と。³⁰⁾

歴史変化をひきおこす原動力（エンジン部門）というのは、やはり生産力の増強を求める経済活動にあることは間違いありません。

5つの領域の相互関係におこった歴史的变化

人類の歴史のなかで、自然（モノ・イノチ）、社会、文化、政治、市場経済という5つの領域相互の比重関係にどのような変化が生まれてきたかを図示したのが、図-3です。図のなかの左側の正三角形は、日本に即していうと200年前

図-3 5つの領域相互の比重関係におこった変化



の江戸時代末期の頃の5領域の比重関係を示しています。また中央部の逆三角形は、現時点における5領域の比重関係を示しています。

この図が示すように近代資本主義の発展とともに、パワーと資源とは、自然から社会へ、そして経済へと吸い上げられ、正三角形の形をしていた人間社会の位置関係が、逆三角形の形に変容していきました。このような逆三角形の形は、不安定であり、どうしてもグラグラしやすい。そこで国家による安定装置——軍隊と刑務所、および自尊心・自立心を損なう「お恵み型福祉」といった「つかえ棒」で支える必要がでてきました。人間活動を自動車にたとえますと、巨大なエンジンを備えた車が制御不能に陥り、道路たる自然を削り取り、ガードレールを壊しながら、目的地を定めることができずに、あてもなく暴走するようになった——それが現代という時代の偽らざる実情ではないでしょうか。

資本主義国のタイプの違いの理由

ヒトの生活を経済、政治、社会、文化、自然の5つの領域の組み合わせという視点から統合的に捉えるという立場にたつと、同じ資本主義国であっても、国情に応じてかなりの多様性があるのはなぜか。その根拠を知ることできます。

たとえば、アメリカ型の資本主義のばあい、経済（市場）領域がもっとも強い影響力をもっています。閣僚たちは、経済界の代表が任命されることが多い

ですし、政治の世界にも市場の論理が貫きがちとなります。また社会（ヒトづくり）も経済の論理で左右されることが多くなります。

他方、日本や東アジア諸国のような「開発独裁」タイプの資本主義のばあい、国家と官僚機構が主導的な役割を果たしてきました。国家が強力な窓口指導と産業政策をとおして、経済領域を指揮し、支援することが多くなりますし、検定教科書などをとおして、ヒトづくりの領域にも影響力をふるいます。

これにたいして、北欧型の資本主義のばあい、社会・文化領域が相当に自律的な活動を展開し、他の領域のありかたに大きな影響力を発揮しているのが特徴です。北欧型の社会では、「社会・文化」部門が発展し、NPO・NGOの旺盛な活動を生み出し、国家権力と企業権力の暴走を、監視し、抑制する力を育んできたのです。この地域では、同じ資本主義国でありながら、民主主義がかなりの程度、根付いています。国政選挙の投票率は、米国のばあいは3割から4割台ですが、北欧諸国のばあいは、7割から8割に達することが普通です。³¹⁾

土地制度の重要性

人間社会のありかたは、その社会が大地・自然とどのような関係を取り結んでいるかによっても左右されるでしょう。封建制度の解体過程で、どれほど徹底した土地革命が行われ、土地資産の民主的な再配分が行われたか。その結果、大地のなかに、どれほど大量の微生物とミミズが生息し、健康な動植物を育み、健康な心身をもつ住民を生み出しているのか。都市住民も、どの程度、家庭菜園を保有し、大地・自然との有機的な関係を保った生活を送っているか——これらの指標いかんで、社会関係の質（住民の健康度、社会関係の平和度）は大きな影響をうけるからです。北欧社会や米国の北東部、それに東アジア諸国では、封建的な大土地所有制度が解体され、大地との健康な関係を維持する自作農民や中産階級が多数生まれました。このような母体から生み出される資本主義国の文化や政治民主主義の水準には、大地主制度や奴隷制度を母体にして資本主義化が進んだ国々とは無視できない違いがあります。

資本主義を変貌させてきたしくみ

1930年代の世界恐慌と第二次大戦の破局から資本主義を救うために、古典的な資本主義は、「修正資本主義」の方向に大きく変貌をとげますが、そのような変貌をもたらしたしくみを探りあてようとするばあい、経済の枠内だけを探しまわっても徒労に終わることが多い。上からは国家・政治の力、下からの市民社会の力とが、資本主義という経済制度の変貌を作り出してきたからです。したがって経済学を学ぶばあい、まずは人間活動の全体システムに注目してください。「自然」（イノチづくり）、「社会」（ヒトづくり）、「政治」（コトづくり）、「文化」（生き方づくり）などを統合したシステム論的視点から「経済」（モノづくりと分配）にアプローチすることがいかに大切であるかを知ってほしいと思います。

長方形型の社会への非暴力的な移行

しかし今日の逆三角形型の社会を200年前の正三角形型の社会に引き戻すことは望ましくもないし、現実的でもありません。ヒトの総人口が数億人レベルであれば可能かもしれませんが、すでにヒトの人口は70億人に達しているからです。

正三角形型社会に戻さなくても、社会の安定を取り戻す道があります。図-3の右側のような長方形の姿に変えるといいのです。長方形型の社会であれば、たとえ人口が90億人になったとしても、自然を損なわないかたちで社会の安定を取り戻すことができそうです。私たちは今、不自然な逆三角形を右側のような長方形の姿に変える課題に直面しているといっても過言ではありません。

経済と政治が吸い上げてきた資源とパワーとを、産みの親たる社会領域や自然領域に戻し、バランスを回復していくには、どうすればよいのか。図-3の逆三角形モデルのなかの経済・政治の張り出した部分を切り取って、これを下半分のへっこんだ部分に移し替えるとよいのです。そうすると逆三角形は、長方形に変わります（なお長方形社会が安定的に続くと、経済・国家・社会の間の境界線がしだいに薄れていく可能性があるので、境界線は点線にしています）。

この「移し替え」作業を戦争や暴力革命を伴わないかたちで遂行することが不可欠となっていることにも注意を向けてほしいと思います。なぜなら戦争や内乱は、今日の条件のもとでは、原子力発電所への軍事攻撃や核戦争に飛び火することが、ほぼ確実だからです。そうなるとヒト社会の持続的な発展は、致命的な打撃を受けるでしょう。

戦争や暴力革命なしに、この壮大な「移し替え」を行うためには、文化（価値観）の革命と並んで、経済改革が決定的なポイントとなっていることに注目してください。³²⁾環境税・補助金などの財政のシステム改革を進め、「移し替え」作業を進めても経済的に損をしない、むしろ経済的に得をするというしくみを作りだし、安心感を与えつつ、人々の文化と意識を変えていくことが不可欠です。「徳が得になる」という経済システムを作り出し、人々の文化と意識を変えていくことが、非暴力的な社会改造のもっとも大切なポイントとなってきてのです。経済を正しく学ぶことがいかに大切であるかが、お分かりいただけたでしょう³³⁾か。

「幸福」とは何か、どう測ったらよいのか

ヒトの生活を経済、政治、社会、文化、自然の5つの領域の組み合わせという視点から統合的に捉えるという立場に立つと、一人当たりの国内総生産（GDP）の大きさだけによって、幸福の大きさを測定することは一面的だということもわかってきます。

ヒマラヤ山中にブータン王国という仏教国があります。最近私も調査にいったのですが、ブータンの一人当たり GDP は日本人の40分の1程度です。しかし年寄りや子供たち、犬や牛などがじつに幸せそうでした。日本では毎年、3万人近くの人が自殺に追い込まれていますが、この国では自殺する人はほとんどいません。

先代のブータン国王が言い出した言葉に「国民総幸福」（Gross National Happiness）があります。「国民総幸福」とは何か。これをどのように測ったらよいのでしょうか。³⁴⁾

ブータンの高僧たちの見解をすこし脚色して要約しますと、つぎのようになります。ヒトの幸福感を決めるファクターには、経済学者が強調する①マネーで購入できるモノ（物財）の豊かさのほかに、少なくともつぎの8つがあります。すなわち②マネーでは購入できないモノ（道路や学校施設などの社会的共有財＝インフラストラクチュアや手作りの自給財）の豊かさ、③コト（人間関係）の豊かさ、④文化的（生き方に迷いが無い）豊かさ、⑤シゴト（働きがい）の豊かさ、⑥自治（民族自決と政治的民主主義）の豊かさ、⑦自然の中のイノチの豊かさ、⑧自由な時間の豊かさ、⑨それらの総結果としてのヒトの全人的発達の豊かさです。これら9つのファクターの総合計によって、幸福感が定まるといえます。

モノの豊かさについても、単純に市場に流通する商品の購入額で決まるものではありません。家庭菜園で新鮮な野菜を家族ぐるみで作ること、気候風土にあったガーデニングを行い、エコロジーに順応した美しい庭を手作りで造ること、こどもの玩具や恋人の衣服を丹精こめて作り、何度も繕うこと、子育てのケアや教育については安易に市場にアウトソーシングしないこと——これまで社会の友愛圏でなされてきた、これらのシゴトがいかに大切であるかは、米国北東部バーモント州マールボロの広大な自宅を美しい庭に変えた絵本作家ターシャ・チューダー³⁵⁾さんの生き方（2008年6月に92歳で死去）が示しています。

日本では京都市北郊の大原の里で、美しいハーブ・ガーデン（家庭菜園）を開いたベニシア・スミスさんの実践、あるいは青森の岩木山麓で「いのちの森の台所」（森のイスキア）を運営し、迷い、疲れ、救いを求めて訪れる人に手作りの食事を供し、寄り添うことで再生のきっかけを与えてきた佐藤初女³⁶⁾さんの実践も教訓的でしょう。

生きるとは、イノチの移し替えのことだからです。そのうえで生存に不可欠な財（水・衣食住・教育・医療）が全員に保障されていること、富の分配が公正に行われていることが、幸せ感をアップさせるポイントとなります。

「足るを知る」長方形型の社会の利点

お釈迦さんが述べられたように、モノの豊かさ感というのは、物財／欲望で決まります。したがって物財の所有量を大きくするのではなく、欲望量を少なくするという方法を使って、豊かさ感を高めるという方法もあるのです。じっさい今日の過剰消費社会では、「足るを知る」という角度からアプローチすることのほうが大切だと多くの人が説くようになってきました。なぜなら地球温暖化を防ぐためには、二酸化炭素の排出量を大幅に削減しなくてはならないからです。「世界には全ての人々を満たすだけの富がありますが、強欲な人々を満たすことはできません。自然には限界がありますが、強欲には限界がないからです」とマハトマ・ガンジーが説いたとおりです。さらに言うと、過剰な飲食こそがメタボリック症候群を生み出し、健康を破壊する元凶となってきたからでもあります。³⁷⁾

「腹八分目医者いらず」という養生訓があるように、「飽食の文明」を止めて「腹八分目の文明」に移ったほうが、常時コンピューターの前に「座る文明」から毎日最低10キロは「歩く文明」に移った方が、「アスファルトの文明」から「土の文明」に移り、土壌のなかの微生物を人の大腸のなかに存分に取り込み、美しい大腸フローラを形成したほうが、「夜も煌々の光の文明」から「夜には暗闇を取り戻し、宇宙の美と神秘を体験する文明」に移った方が良いのではないか。「より多くを所有すべし」という過去1万年の間に形成されてきた人間社会の掟を修正し、「より良く在る」（ウェルビーイングな）生き方を重視する文明に移ったほうが良いのではないか。その方が、野性の体を取り戻し、謙虚に成熟し、健全な免疫力を育み、健康増進にも役立つと説く論者が増えてきました。

逆三角形の社会を長方形型の社会に移行させたほうが、国民総幸福指数を高めやすいことを図-3を用いて、例解してみましょう。逆三角形社会で、経済領域のモノの豊かさ量が仮に20だったとします。経済部門の重みで他の諸部門の質が劣化することは避けられません（経済学用語では、市場活動がひきおこす非市場部門の劣化のことを「コストの外部化」といいます）。そのため政治部門の豊か

さは5に低下、文化部門は3、社会部門は2、自然部門は0に低下したとします。このばあい、5部門をあわせた総幸福量は30に留まります。それにたいして未来の長方形社会では、モノの豊かさはGDP換算で半分に低下し、10となったとします。しかし他の部門の質的劣化が起こらないとすれば、政治・文化・社会・自然部門の豊かさは各10のレベルをキープできるでしょう。そうすると合計の総幸福量は50となり、逆三角形社会の総幸福量の30を大きく上回ることになるでしょう。長方形型の「平和なエコエコノミー社会」への移行が、人の心身を健康にするだけでなく、平和な人間関係を作り出し、豊かで健康な自然を取り戻し、幸福感を増大させるポイントとなるのです。

地域レジリエンス（しなやかな復元力）に富む「パーマカルチャー」社会へ身体や労働から切り離された脳が生み出す想念というのは、数時間も続かないことが多く、経済トレンドなども、数年程度で変わります。これにたいして文化のばあいは、数百年の間変わらないものが多いし、地域のエコロジ的な秩序というのは、数万年後になっても変わらないことが多い。したがってヒトの脳を肉体に埋めこみ、賢い体と丈夫な頭をもった野性的な自然人を育成し³⁸⁾、ヒトの心身を文化とエコロジーの土台に根付かせていくことができれば、暴走するヒトの心は落ち着きを取り戻すでしょうし、暴走する経済システムも安定するようになるでしょう。何があっても折れない、心、暮らし、地域社会をどう作ったらいいのか。その模索は、「地域レジリエンス（しなやかな復元力）を高める運動」として、いま世界に広がっています³⁹⁾。

日々の暮らしを肥沃な土壌の培養と結び付け、レジリエンスの高く、美しく健康的な農的生活を設計し、創造する運動は、「パーマカルチャー」運動として、これまた世界に広がっています⁴⁰⁾。

このような運動の成果に学び、「地域レジリエンスで脱石油文明に移行しよう」とする「トランジション・タウン」の運動もまた、英国のトットネスの地から世界に広がっています⁴¹⁾。

産業化・都市化が極限まで進んだ「先進国」のなかから生まれた、産業化・

都市化の弊害を実践的に乗り越えようとするこれらの運動は、理想的な社会を考え、設計しようとする人々に多くの教訓を与えてくれます。⁴²⁾

5. 人間の発達とは何か——大我の形成めざして、謙虚に成熟を

2つの「自己実現」

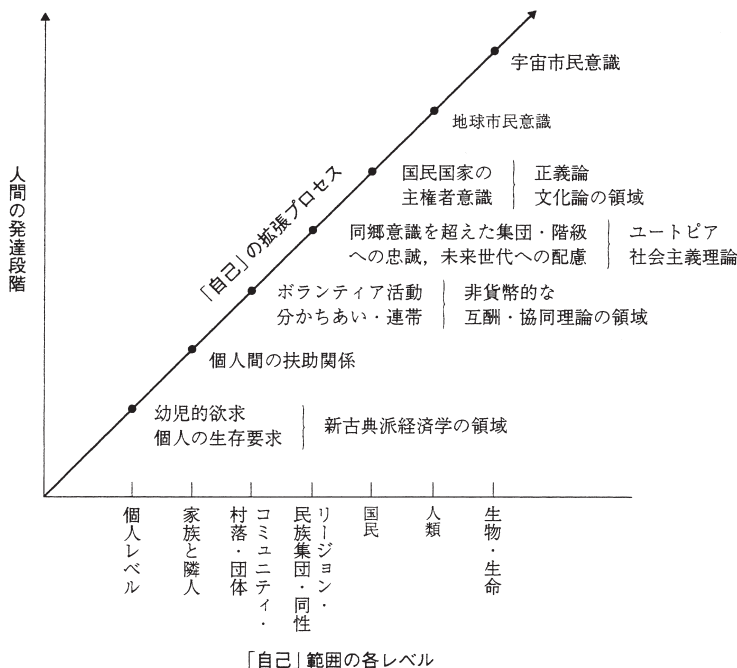
ミヒヤエル・エンデの『モモ』という童話を読まれたことがあるでしょうか。「灰色の紳士たる時間どろぼう」と闘い、盗まれた時間を人間にとりかえしてくれた不思議な女の子——モモの物語です。「灰色の紳士」とは、「合理的経済人」を人格化したもの。同じ自己実現という言葉を使っても、「灰色の紳士」にとっての「自己実現」とモモにとっての「自己実現」とは、大きく異なっています。「灰色の紳士」にとっての実現すべき「自己」とは何か。それは、手（社会）と身体（自然）から切断された指先であり、ビリヤードの球のような存在にすぎず、いのちのない、中身のない「自己」にすぎません。したがってこのような「自己」を実現しようとする内発的なエネルギーは生まれてこない。他人（ボス）からの評価（裁き）と競争から脱落するという恐怖心だけが原動力となりやすいのです。ビジネス書で説かれる「自己実現」とは、このような内容のない、死に物の「自己」実現であることが多いように思います。

それにたいしてモモのばあいの実現すべき「自己」とは何でしょうか。「自己」とは、指先のちっぽけな存在に見えても、よく見ると手・身体・大地とつながった躍動する生命体の一部です。指先（自我）は身体と結びついており、身体は、土台としての家族と「バイオ・リージョン」（人間と生物・非生物がともに作り上げる生命循環系の地域）に根ざしているからです。

モモのような生命力の豊かな子どものばあい、「自己」の範囲とは、成長につれて自然と拡張していくものです。米国の未来学者のヘーゼル・ヘンダーソンの作成した図-4をみてください。

赤ん坊から幼児の時代には、自己利益にかかわる「自己」の範囲は、文字通り本人一人だけ。要求を貫くために、あたりかまわず泣き叫ぶ赤ん坊の姿を思

図-4 人間発達の視点からみた「自己」の拡張プロセス



（出所） Hazel Henderson, Building A Win-Win World, 1995, p. 154を一部改作。

い浮かべてください。通常の人のはあい少年期になると、家族が「自己」利益の範囲に入ってきます。青年期になると、「自己」の範囲がコミュニティや企業団体まで広がってきます。成熟期に入ると、民族や国家まで「自己」の範囲に入り始め、さらに視野が広い人のはあいは、動植物や死んだ人、未来世代、地球の運命までが「自己」のなかに入ってくるでしょう。「地球市民」から「宇宙市民」に向けて拡張する「自己」を論じる彼女の議論は、「正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである」と述べた宮沢賢治の境地と一致しています。

これにたいして新古典派経済学というのは、幼年期の発達段階の自我（小我）に照応した経済学だとヘーゼルは述べています。幼年期を超えて人間が「自己」を拡張し、発達をとげていく展望を閉ざしているからです。

英国の哲学者にして数学者のバートランド・ラッセルも、『幸福論』という著作の末尾で、こう書いています。「私たちが外部の人々や事物に本物の関心を寄せるようになると、自己とその他の世界との対立は、ことごとく消散します。そういう本物の関心を通して、人は、自己が生命の流れの一部であって、ビリヤードの球のような硬い孤立した実体ではない、ということを実感するようになるのです。……そのような人は、自分を宇宙の市民だと感じ、宇宙が差し出すスペクタクルや宇宙が与える喜びを存分にエンジョイします。また自分のあとにくる子孫と自分は本当に別個な存在だと感じないので、死を思っ
て悩むこともありません。このように、生命の流れと深く本能的に結合しているところに、最も大きな歓喜が見出されるのです」⁴³⁾と。

自然のなかで自己と向きあう——「深我」の獲得

大地とコミュニティから切り離され、大都会で孤立した生活を送っていると、真実の自己に気づくチャンスが乏しくなります。それゆえ「大我の人」となるための不可欠の条件は、自己と向きあう空間と時間——プライバシーのための空間と余暇時間を確保することです。結婚後も夫婦は、自己の机、可能ならば個室を確保し、瞑想の時間をもってほしいと思います。

その際、とくに留意してほしいのは、自然のなかで自己と向きあう機会を増やしてほしいこと。なぜなら「私たちは、頭ではなく、身体で他の生物たちと……⁴⁴⁾つながっている」からです。

なぜ自然のなかで自己と深く対話する場を持つことが必要なのか。人間とは社会的動物である前に自然的動物だからだと、画家の宮迫千鶴さんは述べます。「では土を忘れるとき、私たちの心身はどうなるのか。……土を忘れることによって、『いのち』が生から死へ、死から生へと循環しているものだという自然の原理を私たちは忘れてしまう。たとえば雑木林の落ち葉は、はらはらと落ちて土になり、その土は腐葉土として新しい植物を育てるように、私たちの死は新しい世代の生につながっていくのだが、その『いのちのつながり』が見えなくなると、……『自己の人生を満たされたものとして眺める』足場がわから

なくなるだろう。私たち人間は、社会的動物であると同時に自然的動物でもあるが、この『自己の人生を満たされたものとして眺める』ためには、社会的であるだけでは充分ではなく、むしろどれほど、おのれの中に自然性を見つめたかということが重要になると私は思う。その自然性を見つめるための貴重なメディアが土である。つまり土は『いのちの墓場』であり、同時に『いのちの養育場』なのであるが、そのことを魂の深層で納得している人と、そうでない人の精神の落ち着きには、きっと大きなへだたりがあることだろう」⁴⁵⁾と。

6. 自然順応型の経済——「エコエコノミー」を創ろう

「人が最後の木を切ってしまった時、
人が最後の川を汚してしまった時、
人が最後の魚を食べてしまった時、
その時！ 人は気づくだろう。
お金は食べられないということを」

（ナマケモノ倶楽部の地域通貨「ナマケ」の標語から）

「……変えることのできるものを変える勇気と、
変えることのできないものを受け容れる心の優しさ、
いずれであるかを見分けることのできる叡智を
私に与えてください」

⁴⁶⁾
（ラインホルド・ニーバー『平安の祈り』から）

ヒトは、なぜ真と美と善を求めるのか

「文化」というのは、「真美善」原理の支配する世界だと述べましたが、真と美と善（正義）とはどんな関係にあるのでしょうか。

137億年前から宇宙という客観的な存在自体が水素とヘリウムだけの単調で平板な姿から、より多様で共生的で美しい姿へと進化・発展してきました。地球の誕生後は、地球も当初の平板な姿から、多様な樹木が生い茂る深い峡谷を形成し、美しいリアス式の海岸を生み出しました。とくに日本のばあい、列島

を形成する地層が複雑なために、日本の山はどれも個性的で、植物相（フローラ）や動物相（フォナ）はじつに多彩です。⁴⁷⁾

ヒトの手が適切に入ったばあい、自然と人間が調和し共生できる、美しい里山を作り出せることも分かってきました。宇宙と自然の進化という真実の姿こそが、美の具現のプロセスだったのです。単なる事実を真実の一環としてヒトが総合的に認識できるとともに、ヒトの美的な判断力は育まれ、客観化されていったのでしょう。

宇宙の進化のプロセス自体が美の具現化であることが真実であるがゆえに、人間関係をいっそう美しいものにし、人間社会のなかで「平和」を形成するためのルールや行動規範が、「善」とか「正義」と呼ばれるようになったのではないのでしょうか。

ヒトはなぜ真と美と善の価値を求めてやまないのか。宇宙における事物自体が、その方向に進化してきたからです。宇宙の事物じたいが、「自己組織化のパワー」に導かれて、より多様で共生的で美しい姿に進化（自己創発）してきたのが真実の姿であるがゆえに、進化の道をさらに前に向けようとする「宇宙的本能」に駆り立てられて、ヒトは真と美と善（正義・公正）を求めてきたのではないのでしょうか。⁴⁸⁾

もとより、ここ数百年から数千年のスパンで考えたばあい、野蛮な戦争が起こり、公正な関係が破壊されたことがありましたし、美しい自然が汚染され、森林が砂漠に退化し、動植物の多様性が損なわれたこともありました。とはいえ自然と社会とが多様多彩で美しい姿に進化するというのが、宇宙進化の真実の流れであるとすれば、戦争や自然汚染は進化の表層に現れた一時的逆流にすぎないことは明らかです。

脳を身体に埋め戻し、野性的な自然人を育てる

子どもたちは泥んこ遊びに興じ、土壌のなかの微生物を存分に体内に取り込み、大腸の壁面に微生物の織り成す美しいフローラ（花園）が形成されると、免疫力に秀でた野性的な自然人が生み出され、神経過敏症やアトピー性皮膚

炎・潰瘍性大腸炎に苦しむ人の数は減ってくるでしょう。⁴⁹⁾

土壌と大腸の間の微生物循環が進むとともに、地域のなかの水の循環、炭素の循環、そして文化・価値観の循環がスムーズに進むようになるでしょう。

今から90年ほど前、農民詩人の宮沢賢治は『農民芸術概論綱要』を書き、次のように嘆いたことがあります。「曾つてわれらの師父たちは、乏しいながらも可成楽しく生きてゐた。そこには芸術も宗教もあった。いまわれらにはただ労働が、生存があるばかりである。宗教は疲れて近代科学に置換され、然も科学は冷く暗い。芸術はいまわれらを離れ、然もわびしく墮落した。いま宗教家・芸術家とは、真善美を独占し、販るもの」となったと（正確には、最後の一節は、「いま職業的学者・宗教家・芸術家とは、真善美を独占し、販るもの」となったと改めべきでしょう）。

しかし自然と社会、大地と人とを再統合する方向に世の中が動き出すと、社会と経済と文化とを隔ててきた強固な壁が溶け始め、学問と芸術・宗教を隔ててきた壁も低くなり、大地に根を張り、謙虚に成熟した「土人たち」による「野性的な自然人」復活のための「農民芸術」が花開く時代となるのではないでしょう⁵⁰⁾か。

「土人」（あるいは「地人」）といえば、粗野で野蛮な人たちというイメージがありますが、それは過去1万年の間に産業主義・都市主義が生み出してきた偏見です。「土人」たちの文明の創造的復活なしには、健康な心身の発達も、健康な社会関係（＝平和）の再生もない時代となってきました。

エコロジーのなかにエコノミーを埋め戻し、自然順応型文明をめざす

もともとエコロジーとエコノミーというのは同一のラテン語——オイコス（oikos）から生まれた言葉。オイコスというのは人の棲家（すみか）という意味です。インド生まれの哲人サティシュ・クマールさんが述べているように、この棲家の性質についての認識をエコロジーといい、その棲家を管理する営みのことをエコノミーと呼んだのです。土でできているのか、木でできているのかといった家の性質を理解せずには、家の適切な管理は、できない相談です。エ

コロジ的な認識を土台にしないとエコノミーの管理は不可能なはず。一流のエコロジストでなければエコノミストの仕事は務まりません。しかるに現代世界のエコノミストたちの大多数は、エコロジーの認識が欠けたまま、棲家の管理に携わっています。ここに現代の不幸の一因があります。

結論を申せば、21世紀が「自然とイノチの世紀」にならないかぎり、人類の未来はありません。私たちは、じつは「万物の霊長」ではなく「万物の癌細胞」にすぎなかったことが露見して、減んでいくだけでしょう。「環境」というのは、36億年も続いてきた地球のなかのイノチの流れのことであり、「生きる」とはイノチの移し替えのことに他なりません。そのような「生命系システム」の内部の片隅にヒト社会が生まれ、そのまた一隅に経済システムが生まれてきたことを、まずしっかりと自覚してください。そのうえで、今日の経済を「エコエコノミー」（自然体の経済）に作り変える課題にとりくんでほしいと思います。

現下の不況を克服しつつ、この方向に経済を向けていくために、「グリーン・ニューディール」の推進が叫ばれています。グリーン・ニューディールを本格的に実践するには、ブラック・ブルー・ピンクの三色のニューディールを推進することが必要ではないかということを、私は提言しています。ブラック（炭素のままで土壌に埋め戻し、土壌の炭素と微生物の含有率を高め、肥沃な黒土をつくる）ニューディール、ブルー（二酸化炭素を海に吸収し、海藻・サンゴ礁を養い、海底に石灰岩を埋め戻していく）ニューディール、ピンク（人のお世話とケア・医療、教育を重視する）ニューディールをめざすことが大切です。現下の世界的なデフレ経済を軍拡や戦争によって「解決」という道を選ばないとすれば、エコエコノミーの創造というもう一つの戦略的な目的を実現するために、世界資源を動員する「総動員経済」を構築し、そのなかで失業者を無くしていく以外⁵¹⁾にないのではないかと。そのように私は考えています。

自然順応型の生き方の創造

皆さん方の学び方いかん、学びに導かれる実践いかんに、地球の将来がかか

っています。「平和なエコエコノミー」の創造めざして、皆さん方の自発的（ボランタリー）な実践活動を期待するしだいです。

「ボランティア」とはどんな人のことなのでしょう。「言われなくてもする人」というだけでは不十分。「言われてもしない不服従の人」。M. K. ガンジーが実践したように「マイライフ イズ マイメッセージ」といえる人生を送ろうと決意した人のことではないでしょうか。

このようなボランティアとして生きる喜びを歌った二つの詩を皆さんに贈りましょう。「私は眠り、人生は喜びだという夢をみた。私は目覚め、人生とは奉仕だと知った。私は行動し、目をこらす。奉仕は喜びだった」（ラビンドラナート・タゴール）。

アッシジの聖フランチェスコも、「平和の祈り」という有名な詩歌のなかで、次のように歌っています。「……慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですから」と。

「私が生まれた時、私は泣き、皆が笑った。私が死ぬ時、私は微笑み、皆が泣くでしょう」——こんな一生を送るにはどうしたらよいのか。決った「正答」のない難問ですが、そんな課題の探索を一生のテーマにされたらいかがですか。

腐らずに枯れていく——自然死の文明へ

ラビンドラナート・タゴールといえば、インドの生んだ偉大な詩人、英文詩集「ギタンジャリ」を書いて、アジア最初のノーベル文学賞を授与された人ですが、そのなかで、彼はこう歌っています。「わたしは、この生を愛するがゆえに、死をもまた愛するだろう……幼な児は、母の右の乳房から離されると泣き叫ぶが、次の瞬間、左の乳房をふくませてもらって、安らぎを見出す⁵²⁾」と。母の乳房から離されて泣き叫ぶ期間とは、自我の確立する60—70年間のことにすぎず、宇宙史的には「瞬間」に過ぎないでしょう。

自然順応型文明にとって、どのような死に方が求められるのでしょうか。敬愛するサティシュ・クマールさんがヒントを与えてくれました。サティシュのお母さんは、敬虔なジャイナ教徒の常として、死期を悟ったときに、断食に入られたそうです。水分の補給は続きますが、カロリーの摂取は自粛されたために、枯れるよう、朽ちていかれたそうです。まるで樹木の葉っぱのように、腐敗臭を残さずに、多くの親族や親身な友人たちに看取られつつ、旅立たれたのです。⁵³⁾

注

- 1) シュミット・ブレイク『ファクター10』1997年、シュプリンガー東京。
- 2) デービッド・コーテン『グローバリズムという怪物』1997年、シュプリンガー東京。
- 3) マーティン・J・フレイザー（山本太郎訳）『失われゆく我々の内なる細菌』2015年、みすず書房。195-198ページ。
- 4) その一つの試みとして、広井良典『グローバル定常化社会——地球社会の理論のために』2009年、岩波書店。
- 5) 佐藤勝彦『ニュートリノと宇宙創生の謎』2012年、実業之日本社、99ページ。
- 6) 谷口義明『宇宙のはじまりの星はどこにあるのか』2013年、メディアファクトリー、62-73ページ。
- 7) 佐藤勝彦『ニュートリノと宇宙創生の謎』2012年、実業之日本社、44ページ。吉田直紀『宇宙で最初の星はどうやって生まれたのか』2011年、宝島社新書。
- 8) スチュアート・カウフマン（米沢富美子監訳）『自己組織化と進化の論理』1999年、日本経済新聞社、16～17, 24, 35ページ。
- 9) NHK取材班『NHKサイエンス・スペシャル「銀河宇宙オデッセイ2——超新星爆発」』1990年、日本出版協会、79-83ページ。
- 10) 佐治晴夫『宇宙の風に聴く一君たちは、星のかけらだよ』1994年、かたつむり社。
- 11) ポール・G・フォーコウスキー『微生物が地球をつくった』2015年、青土社、ニコラス・マネー『生物界をつくった微生物』2015年、築地書館。
- 12) ウィリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』1997年、三田出版会。
- 13) デヴィッド・スズキ（辻信一訳）『いのちの中にある地球』2010年、NHK出版、38ページ。デヴィッド・スズキ（辻信一・小杉恵訳）『きみは地球だ』2007年、大月書店。

- 14) 赤井純治『地球を見つめる「平和学」』2014年，新日本出版社，89-100ページ。
- 15) 「36億年の歴史を持つDNAの発する強い力と，たかだか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」（柳澤桂子『意識の進化とDNA』1991年，地涌社，6ページ）。
- 16) 高木善之『地球大予測』1998年，サンマーク出版，140-141ページ。
- 17) 諸富祥彦『生きていくことの意味』2001年，PHP新書，53-65頁。同『どんな時も人生にYESを言う』1999年，大和出版，124-131頁。谷口義明『宇宙のはじまりの星はどこにあるのか』2013年，メディアファクトリー，54ページ。
- 18) クリストファー・ロイド『137億年の物語——宇宙が始まってから今日までの全歴史』2012年9月，文芸春秋，第2部。ただし「母なる自然」から人が枝分かれする画期を，著者は700万年前としている。
- 19) 竹岡俊樹『旧石器時代人の歴史——アフリカから日本列島へ』2011年，講談社，『朝日新聞』2012年4月3日付け夕刊。
- 20) 帯刀益夫『われわれはどこから来たのか，われわれは何者か，われわれはどこへ行くのか』2010年，早川書房，44-56ページ。クリストファー・ロイド『137億年の物語——宇宙が始まってから今までの全歴史』2012年，文芸春秋，第1部—第3部。
- 21) 沖縄の清明祭との出会いを描いた草場一寿『毎日がいのちのまつり』2011年，サンマーク出版，20-30，65ページ。
- 22) マット・リドレー（大田直子ほか訳）『繁栄——明日を切り拓くための人類10万年史』2010年，早川書房，18-19頁，第2章。
- 23) 内山節『市場経済を組み替える』1999年，農文協，211ページより。
- 24) P. シープライト（山形浩生ほか訳）『殺人ザルはいかに経済に目覚めたか——ヒトの進化からみた経済学』2013年，みすず書房，61，187-188，354-363ページ。
- 25) カール・ポラニー『大転換——市場社会の形成と崩壊』新訳版，2009年，東洋経済新報社。
- 26) 唯物史観と分化理論については，千石好郎『マルクス主義の解縛』2009年，ロゴスの第7章，村岡到『友愛社会をめざす』2013年，ロゴス，84-85ページ。シェリングの研究者の西川富雄さんも，私と類似した視点で，「自然を主体にした哲学」を考えておられる。西川富雄『環境哲学への招待——生きている自然を哲学する』2002年，こぶし書房，59，86-89ページ参照。このような自然主体的な唯物論の源流には，梯明秀さんの独創的な仕事があった。梯明秀『物質の哲学的概念——社会の自然史的把握のために』1948年，白東書館，梯明秀『全自然史的過程の思想』1980年，創樹社。関連して山尾三省『アニミズムという希望』2000年，野草社や岩佐茂・佐々木隆治編著『マルクスとエコロジー』2016年，堀之内出版のとくに第2章も参照。

- 27) たとえば古沢広祐「地球サミットから20年（リオ+20）、未来をどう展望するか」『ピープルズ プラン』59号、2012年秋、148ページを参照。
- 28) ヴァンダナ・シヴァ（熊崎実訳）『生きる歓び——イデオロギーとしての近代科学批判』1994年、築地書館のとくに第2章。
- 29) 高橋伸夫『育てる経営の戦略——ポスト成果主義への道』2005年、講談社、73ページ。
- 30) カール・マルクス『経済学批判への序言・序説』1859年、14-15ページ。
- 31) 藤岡惇「デンマークに学ぶ非暴力的な社会変革の道」『立命館経済学』62-5・6号、2014年3月。
- 32) サティシュ・クマールはじめ、52名の新しい文化・価値観創造の担い手との交流の記録は、辻信一『カルチャー・クリエイティブ——新しい世界をつくる52名』2007年、ソトコト新書。
- 33) サティシュ・クマール（尾関修ほか訳）『君あり、故に我あり——依存の宣言』2005年、講談社学術文庫、同『つながりを取りもどす時代へ』（枝広淳子監訳）2009年、大月書店。エックハルト・マインベルク（寿福真美・後藤浩子訳）『エコロジー人間学——ホモ・エコロギクス 共生の人間像を描く』2001年、新評論、とくに第5章。
- 34) 辻信一編著『GNH もうひとつの豊かさへ、10人の提案』2008年、大月書店。
- 35) ターシャ・チューダー『楽しみは創り出せるものよ』2003年、メディアファクトリ。
- 36) たとえば佐藤初女『いのちの森の台所』2010年、集英社。
- 37) 安原和雄『足るを知る——仏教思想で創る21世紀と日本』2000年、毎日新聞社のとくに第3章。
- 38) 町田宗鳳『「野生」の哲学——生き抜く力を取り戻す』2001年、ちくま新書。
- 39) 枝広淳子『レジリエンスとは何か——何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる』2015年、東洋経済新報社。
- 40) ビル・モリソン（田中恒夫・小祝慶子訳）『パーマカルチャー——農的暮らしの永久デザイン』1993年、農文協。
- 41) ロブ・ホプキンス（城川桂子訳）『トランジション・ハンドブック——地域レジリエンスで脱石油社会へ』2013年、第三書館。勝俣誠、マルク・アンペール『脱成長の道——分かち合いの社会を創る』2011年、コモンズ、126-127ページ。
- 42) セルジュ・ラトーシュ（中野佳裕訳）『脱成長は、世界を変えられるか？——贈与・幸福・自律の新たな社会へ』2013年、作品社。ジェレミー・リフキン『限界費用ゼロ社会——モノのインターネットと共有型経済の台頭』2015年、NHK出版、のとくに第1章、第5部。ダニエル・コーエン（林昌宏訳）『経済と人類の1万年

- 史から、21世紀世界を考える』2013年，作品社，第15章。工藤律子『雇用なしで生きる』2016年，岩波書店。
- 43) バートランド・ラッセル『幸福論』1991年，岩波文庫，273ページ。筆者は，米国で活動する小田まゆみの画業，仏教徒の平和活動家のジョアンナ・メーシーの思索と実践から多くを学んできた。ジョアンナ・メーシー『アクティブ・ホープ』2015年，春秋社，第5章を参照。自己実現理論の開拓者として有名なエイブラハム・マズローも晩年期になると，「自己実現」を果たした人は自然と「自己超越」という至高の段階をめざすようになると説くようになった。
- 44) 田口ランディ『できればムカつかずに生きたい』2000年，新潮社，162ページ。
- 45) 宮迫千鶴『土の力』『読売新聞』1996年6月の記事より。
- 46) 鈴木有郷『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』1998年，新教出版社，139ページ。
- 47) 小泉武栄『日本の山と高山植物』2009年，平凡社。
- 48) J.D.バロー『宇宙のたくらみ』2003年，みすず書房，328・335ページ。
- 49) ニコラス・マネー『生物界をつくった微生物』2015年，築地書館，第6・8章。澤田幸男・紙矢丈児『腸が寿命を決める』2015年，集英社新書，2・3章。藤田紘一郎『脳はバカ，腸はかしこい』2012年，三五館，第1章。
- 50) 小貫雅男・伊藤恵子『グローバル市場原理に抗する静かなるレボリューション——自然循環型共生社会への道』2013年，御茶の水書房，リーアン・アイスナー『ゼロから考える経済学』2009年，英治出版。イ・テグンほか（金明姫・二葉真弓訳）『農夫から——自然からふく風，都市をかえる』2013年，素人社。
- 51) この点を明らかにした本に，レスター・ブラウン『プランB 4.0』2010年，ワールドウオッチ・ジャパンがあります。私も，そのための経済改革構想を発表しています。藤岡惇「持続可能な日本づくりのアジェンダの提案」森岡孝二ほか編『二一世紀の経済社会システムを構想する』2001年，桜井書店，参照。
- 52) タゴール『ギタンジャリ』95節，森本達雄編訳『タゴール 死生の詩』人間と歴史社，22・53ページ。
- 53) レオ・バスカーリアの書いた素晴らしい童話『葉っぱのフレディ——いのちの旅』，1998年，童話屋も参照。

補説- 1

ミミズと地球と経済学

「……生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人の中に死んだ人もいっしょに生きているから、人間はやさしい気持ちをもつことができるのよ。ふうちゃん。」

（灰谷健次郎『太陽の子』）

2007年のノーベル平和賞は、地球温暖化問題に警鐘を鳴らしたアル・ゴアさんたちに与えられた。2006年度はグラミン銀行を創設したモハメド・ユヌスさん、2004年にはケニアの農村女性とともに植林作業に取り組んだワンガリ・マターイさんが受賞された。崩れぬ平和を築いていくには、軍事や外交だけに注目しても限界がある。もっと深部に注目し、平和の経済的ないしエコロジ的基盤を築く営みを重視すべきだというメッセージを、ノーベル賞選考委員会は送ろうとしたのだろう。

森を造ると雲が浮かび、土壌を肥やすと平和が築ける

第一次大戦前夜にキリスト者の内村鑑三が、『デンマルク国の話』（岩波文庫）という本のなかで紹介した「もみの木の植林」の話をご存知だろうか。

1864年にプロシアとの戦争に敗北したことを契機に、デンマーク国民は覇権戦争に走ることを悟り、「外に広がるのではなく、内を開拓しよう」という道を選び、ユーラン半島北部の不毛の地に植林しようとした。大変な労苦のすえ100万エイカの荒地は豊かな森林に変わっていった。荒地や砂漠のばあい、たまに雨が降っても水分はすぐに地域外に流出していく。これにたいして森林のばあい、雨水は葉っぱや下草に長く留まるので、太陽が戻ってくると森の上にはぽっかりと雲が浮かぶ。そうすると雨がよく降るようになるので、気候は温

和となり、土壌が肥沃になる。その結果、デンマークは屈指の豊かな酪農国に変貌したのだと内村は説き、満州に進出しようとしていた当時の日本の帝国主義的な風潮に警告を発したのだ。¹⁾

肥沃な土壌のばあい、一つまみの土のなかに60億を超える微生物が生息している。わずか1グラムほどの土壌のなかに、人類の総数に等しい数の微生物が織りなす世界が展開しているのだ。土壌のなかの微生物を栄養源にして大小多様なミミズが生息するようになると、大量の糞を生み出し、土壌を肥やしてくれる。かつてチャールズ・ダーウィンは、ミミズを「地球の偉大な大腸」と形容したことがあるが、ミミズが大量にいるところでは畑を耕す必要さえ減るといふ。ミミズが無数のトンネルを掘り、土を団粒化し、土壌をふっくらとさせてくれるからだ。このような微生物が分解した化合物を栄養源とすることで植物が健康となる。この植物を栄養源にすることで健康な動物が生まれ、これら動植物の「いのちをいただく」ことで、心身ともに健康な人間が育まれる。また人間の生存のために不可欠な「人権財」（たとえば水・食物・エネルギー）だけでも自給できるようになると、生存への不安感は減り、国際関係はもっと穏やかで、協調的なものとなるに相違ない。したがって土壌のなかで大量のミミズが幸せに暮らしている国ほど、住民の健康度、社会関係の平和度が高くなっていくのは当然だ。

地球温暖化を防止するために必要なこと

地球圏のなかで炭素はどこに分布しているのだろうか。海洋の炭素固定化作用（二酸化炭素を石灰岩に変える作用）をひとまず措くとすると、いま世界では、²⁾固体の炭素が毎年72億トンほど燃やされ、二酸化炭素に姿を変えて大気中に排出されている。

その結果、第1に炭素は7500億トンの二酸化炭素という姿をとって大気中に存在するようになり、大気熱の地球外への放散を妨げ、大気圏の温暖化をもたらしてきた。第2に、炭素は化石燃料（石炭・石油・天然ガス）という姿をとって、地中のなかに4兆トン存在している。第3に、5500億トンの炭素が、地上

（一部は海中）の植物（樹木や野菜、海草）という姿をとって固定化されている。第4に、土壌有機物という姿をとって1.5兆トンの炭素が土壌のなかに留まっている。なお注釈を加えると、土壌とは、微生物が大量に生育している地層をいい、地球の表層をごく薄くおっているにすぎない。地表から1メートル以上の深さに達するケースはごく稀だという。

地上の植物群が蓄える炭素の3倍という膨大な炭素が土壌内に存在しているのだ。土壌のなかで炭素の一部は酸素と化合して二酸化炭素、泥土のなかの発酵を介してメタンガスとなっているが、地中に閉じ込められている限り、温暖化を促進することはない。地上の植物のばあいは、平均すると10年後に炭素は二酸化炭素となって放出されるが、炭素が土壌の中に入りこむと、地上よりもはるかに安定的となり、平均すると50年は地中に留まるとい³⁾う。

炭素を大地に戻すための計画

豊かな土壌をつくるにはどうしたらよいのだろうか。まずは落ち葉・稲わら・生ゴミ・糞尿の堆肥化を進め、土に戻す。その上で荒地や遊休地に木を植えていく。住宅を建てるばあいは、材木の地産地消を奨励し、近隣の成木を伐採し、百年は住める良質な住宅をつくるという運動を展開したいと思う。木造住宅・ログハウスからなる街を造ることは、炭素の固定化という観点からみると大規模な造林事業を行っているのと同じこと。樹齢百年めざす「都市の森」創生計画だと言い換えてもまちがいでない。

百年後に家を取り壊したとしよう。その際に大量の廃材が出てくるだろう。廃材は炭にし、細く砕いたうえで、土壌のなかに埋めもどしていこうというのが私の提案だ。炭化しておくで酸化されにくくなるので、炭素の土壌中の滞留期間は50年より長くなるだろう。炭の表面には無数の穴が開いているので、微生物の格好の棲み家となり、土壌も肥えていくだろう。多様な炭素化合物からなる腐植土を豊富に含む土は黒くなる。この作業をとおして、日本の大地を肥沃な黒土地帯に変えていきたいものだ。

私は、もう一つの構想も温めている。廃材などを土壌圏より深い地層に埋め

込み、貯蔵していこうという計画である。数百年たつと泥炭になるだろう。数万年たつと立派な炭田、数百万年たつと立派な油田が復活してくるかもしれない。エネルギー不足に見舞われたときには掘り出して使うことができるので、「エネルギーの安全保障」にも役立つだろう。

炭鉱の坑道跡や油田の底に二酸化炭素をポンプで送りこみ、長期間封じ込めるという計画が進められているが、この種の計画のばあい、実現するには莫大なコストがかかるだけでなく、周辺の生態系に悪影響を及ぼす危険があるし、土壌を肥やす役割もはたさない。このような高価で危険な計画よりも、堆肥づくりを進めたり、廃材を土壌に戻していくほうが、はるかに優れている。すでに日本の関西電力は、インドネシアの現地植林会社と協同して、廃材を炭化して、できた炭を土壌改良剤として土地に戻す計画をもっているという⁴⁾。

動物が幸せになると人間も幸せとなり、経済も繁栄する

動物が野生のなかで本来の幸せを実現しているシーンを見ると、人間も幸せな気分になっていくものだ。その証拠が北海道旭川市立の旭山動物園の事例であり、兵庫県豊岡のコウノトリの郷文化公園ではないだろうか。渡り鳥のコウノトリが再び飛来してくれるよう、有機農業に徹し、農薬を使わない農村づくりをしようと豊岡盆地の農民たちは決意した。コウノトリが幸せになる地域づくりに励むことで、人間も幸せになれる。そうすると観光客の心の琴線に触れるので、経済的にもペイするという好循環が、豊岡の地に生まれ始めたように思われる⁵⁾。

むかし「労農同盟」（労働者と農民の同盟）という言葉があった。21世紀という時代は、この「労農同盟」という言葉の皮袋に新しい内容を盛り込む時代になるのではないだろうか。「生き物と死に物」「農村と都市」の同盟を介して、自然体の体をとりのどし、心身をエコロジーと文化のなかに埋め込んでいき、大地と宇宙に根を下ろしていく生き方を実践する時代になるであろう⁶⁾。

漫談家の綾小路きみまろさんは、富士山麓で始めた家庭菜園づくりの体験について、つぎのように語っている。「東京では、人の顔色をみながら、『どうや

って生きようか』ってなるけど、田舎では、ミミズの顔をみて、『おれは生かされているんだ』、『どうやって死のうかな』⁷⁾って考えられる」と。「都会の銀行に預金がある安心感とは質の違う、大地に生かされているという根源的な安心感」（きくち・ゆみ）を培っていけるタイプの経済学、「自然を崇敬する唯物論」の立場にたった経済学こそが求められているのであろう。

自然・イノチを崇敬する唯物論の大切さ

2050年までに二酸化炭素の排出量の半減を実現するためのもっとも実り豊かな方策の一つは、炭素を土壌のなかに固定化していくことだと述べてきた。日本の土壌のなかの炭素含有比率を大幅に引き上げていく「国土の黒土化」年次計画を策定することがまず必要だろう⁸⁾。そのための国民的キャンペーンを先導し、持続可能で平和な社会経済を築いていくためには、どのような質の哲学と経済学が必要なのであろうか。

自然・宇宙の壮大な進化発展の姿をつかめず、生き物と死に物との区別さえつかない「機械的唯物論」では、到底その任には耐えられないであろう。

他方、近代の経済学は、人間をエコロジ的な土台や社会・歴史の枠組みから切り離し、類（人類・生物）と累（祖先と子孫）から孤立した「合理的経済人」モデルという枠組みのなかで、人間を捉えようとした。そのため大地・自然が人間を生み出し、「いのち」（身体）が精神（脳・自我）を生み出し、「イノチ」が「私」を生きているにもかかわらず、あたかも人間のほうが大地・自然を所有・支配し、精神（脳・自我）のほうが「イノチ」（身体）を所有・支配しているかのように考えてきた。

また人間（自己）とは、「正しいから行動する」という倫理的動機と「得するから行動する」という経済的動機の二本柱で行動するものであり、そのばあいの「自己」の範囲も、人間的発達のレベルに応じて、大きくも小さくもなる。人間的発達のレベルが高くなると、「自己」の範囲は、「孤独な脳」から身体、家族、一族郎党、地域社会、民族、国民、人類、生物界、地球といったレベルに拡張し、「自我」は「小我」から「大我」へと発展していくものだ。しかる

に近代の経済学は、自我の発展を「小我」というレベルに固定し、「自分だけ、今だけ、お金だけ」というレベルで行動する「合理的経済人モデル」が実際に成立するかのよう⁹⁾に仮定して、経済理論を組み立ててしまった。

自分の脳を主軸として世界は回っているかのように考えるこのような天動説的な観念論と経済への還元主義という二重の誤りを克服していくことが、持続可能な経済社会を築いていくために不可欠だと、私は考える。言い換えると私（自我・脳）がイノチをもっているという観念論的観点から、イノチ（客観的な自然史のなかのイノチの流れ）が私として存在している（イノチが私を生きている）という唯物論的観点に転換することが必要なのだ⁹⁾。

弁証法的唯物論を「自然・イノチを崇敬する唯物論」に鍛え上げ、そのような宇宙観・人間観に立脚した経済学を構築していきたいものである。

注

- 1) 藤岡惇「デンマークに学ぶ非暴力的な社会変革の道」『立命館経済学』62-5・6号、2014年3月。
- 2) 毎年大気圏に排出される72億トンの二酸化炭素のうち約20億トンは海洋に吸収され、海洋中のカルシウムと化合して炭酸カルシウムとなり、海底の石灰岩に姿を変えて蓄積されているという。竹村真一『Water 水』2007年、ワールド・フォットプレス、78ページを参照。
- 3) 詳細は、木村真人ほか編『土壌圏と地球温暖化』2005年、名古屋大学出版会を参照。
- 4) 『朝日新聞』2002年9月13日付け。なお炭素循環農法・実践図書館のホームページも参照。
- 5) 菊池直樹『蘇るコウノトリ——野生復帰から地域再生へ』、2007年、東京大学出版会を参照。
- 6) この点の大胆な提起は、小貫雅男・伊藤恵子『森と海を結ぶ菜園家族』2004年、人文書院。
- 7) 『朝日新聞』2007年5月20日付け。
- 8) 瀬戸昌之「TPPが日本の農林業の公益的価値および農山村活性化に及ぼす影響を考える」『日本の科学者』46-7、2011年7月号、54-56ページの優れた提言を参照されたい。

- 9) 今日、進んでいる宇宙観・自然観の革命的な変化は、弁証法的な唯物論哲学を発展させる好機であるが、それに失敗すれば新たな観念論と神秘主義、迷信やオカルトの類を生み出す危険がある。百年前に同様の危機に直面してレーニンは、こう書いていた。「新しい物理学が観念論にまよいこんだのは、……物理学者が弁証法を知らなかったからであつた。……今日の『物理学的』観念論は……自然科学者の一学派が、形而上学的唯物論から弁証法的唯物論へまっすぐにすぐさまのぼることができなかったので、反動哲学へ転落したことを意味するにすぎない。……現代物理学は産褥にある。それは弁証法的唯物論を産もうとしている」と。レーニン『唯物論と経験批判論』邦訳全集版14巻、大月書店、315・378ページ。自然史と社会史とを分離したスターリンの産業主義的誤りの適切な批判として、梯明秀『物質の哲学的概念——社会の自然史的把握のために』1948年、白東書館、梯明秀『全自然史的過程の思想』1980年、創樹社があつた。シェリングの研究者の西川富雄さんも、私と類似した視点にたつて「自然を主体にした哲学」を考えておられる。西川富雄『環境哲学への招待——生きている自然を哲学する』2002年、こぶし書房、59、86-89ページ参照。あわせて山尾三省『アニミズムという希望』2000年、野草社、サティシュ・クマール（尾関修ほか訳）『君あり、故に我あり—依存の宣言』2006年、講談社学術文庫、町田宗鳳『人類は「宗教」に勝てるか——神教文明の終焉』2007年、NHK出版も参照していただきたい。

補説- 2

ライフスタイルの転換

——「持つ」から「在る」へ——

自然とイノチが先か、自我と意識が先か

「唯物論的アニミズムの世界観の創造」という論文を書いて、『唯物論と現代』という雑誌の36号（2005年11月）に載せてもらったことがあります。そこでサティシュ・クマールの新著を引用しつつ、「我思う、ゆえに我あり」という天動説的な観念論（デ・カルト主義）を離れ、「君あり、ゆえに我あり」という唯物論的な見地に転換することこそが、人間発達の課題ではないかという問題提起を行いました（サティシュの本は、尾関修さん父子の手で翻訳されました。『君あり、故に我あり』講談社学術文庫、2005年で、なかなかの名訳です）。

同じような提起を「平和の経済学」という授業を担当するなかで、私も行ってきました。「私（自我）が『いのち』を所有しているのですか、いのちが私という姿をとって存在しているのですか」というクイズを出題し、解答を寄せてもらうのです。第2回クイズは、「あなたのいのちは、あなたの私有財産ですか。それとも誰かから運用を委託された信託財産ですか。後者のばあい、誰から何のために信託されたのでしょうか」というものです。2つのクイズは、学生たちの間に新鮮な反響を呼びました。この問いに真剣に答えようとする、主流派経済学（および近代主義的に歪められたマルクス経済学）が暗黙のうでで前提している「合理的経済人モデル」という人間観がゆさぶられるからです。

エーリッヒ・フロムの提起——「持つ」が先か、「在る」が先か

ところで私が若い頃に愛読していた思想家のなかに、ナチスドイツから米国に亡命してきた社会心理学者のエーリッヒ・フロムがいます。最近、彼の『生きるということ』（紀伊国屋書店、1977年。原題は、To Have or to Be?, 1976）と

いう本を再読する機会がありました。フロム晩年（76歳のとき）の作品ですが、私とほとんど同じ見地に達していることに驚きました。

「私（脳）が体（いのち）、大地・自然を支配し、所有している」というのが近代人の典型的思考だとフロムは述べます。近代人は、「眠ることができない」といわずに「不眠症をもっている」、「幸福な結婚をしている」といわずに「幸福な結婚生活を持っている」、「恋人がいる」というかわりに「恋人を持っている」と考える思考法に染まってきたと彼は論じています（フロム『生きるということ』邦訳、42-43ページ）。「私は生きている」（イノチが私を生きている）といわずに「私はイノチを持っている」と表現するのも、近代人特有の思考様式だと言ってよいでしょう。

本来「持つ＝所有する」とは、100%支配できるということです。「死に物」や、自らで作ったものは、たしかに100%支配できるでしょう。しかし、友人や恋人、大地というのは、宇宙における命の流れの一部であり、人間（脳）が製作したものではないし、支配・所有しようと頭で妄想しても、できない相談です。

このことを弁えず、自然の動きや人の行動を100%支配しようと妄想すれば、幼児を縛りつけて性愛に耽るか、異性を殺して屍体にしたうでなければ、安心して愛することができない。中途半端な形で支配しようとすると、愛憎相半ばの修羅場の世界に陥りかねません。

このように自らの非力におびえるあまり、自然や人間まで所有しないと安心できないとする近代人が陥るパニックの症状が、「幼児愛」や「屍体愛」にほかならず、いわゆる「ネクロフィリア」という異常性愛者の性向なのだとフロムは論を進めます。このような角度から彼が展開するヒトラーやスターリンの精神分析は秀逸です。

社会全体のネクロフィリア（屍体愛）度（関連してサド・マゾの性向）を減らし、非暴力的で健康なバイオフィリア（自然な生命愛）を増やすためには、どうしたらよいのか。「持つ」に執着するライフスタイルを減らし、「在る」を重視するライフスタイルに転換し、生き物たちの演ずる「生命の舞踏」の輪に加わり、

交流していく以外にないとフロムは論を進めます。

健康な人間関係づくりの5条件

このような健康な人間への発達を保障し、イヴァン・イリイチの言う「コンヴィヴィアルな共愉・共響の社会」を創造するには、どのような社会経済的条件が必要なのでしょう（コンヴィヴィアルな共響社会の詳細は、勝俣誠、マルク・アンベール編著『脱成長の道——分かち合いの社会を創る』2011年、コモンズ、のとくに第2部1-3章を参照してください）。

本書でフロムの提案している構想は、私たちの模索してきたことと重なり合います。第1に財貨の「固有価値」の唯物論的探究です。「使用価値の公共性」の探究といってもいいでしょう。フロムはこう述べています。「何が生命を促進し、何が生命を害するかを検討するために、……食品安全局がなしたことをはるかにしのぐ研究を行わなければならない。……どの要求が私たちの有機体に起源を発しているのか。どれが文化過程の結果なのか。……どれが病理に根ざし、どれが精神的健康に根ざしているのか」の唯物論的研究こそが必要だと（フロム、邦訳、236ページ）。

第2に、「正気の消費のための一大教育運動を進め、……消費の型を変えていく」。これと並行して消費者ボイコットの運動を展開し、企業の社会的責任を問う運動を展開する。「正気の消費は、大企業の株主や経営者が企業の利益と発展のみに基づいて生産を決定する権利を、大幅に制限したときに、はじめて可能となる」からだと言っています。

第3に、参加民主主義を徹底していくことであり、その一つの方法をフロムは提案しています。すなわち、500名ほどの有権者からなる住民集会を全土に無数に設置せよということです。スイスの地域自治体のように、地域の有権者が全員参加できる住民集会を適宜開き、十分な情報を与え、深い討論を介したうえで、政治課題について投票するようにせよということです。数十万箇所住民集会が開かれても、先端的な情報通信技術を使うと、議論と投票の結果は、すぐに集計できるでしょうし、民主主義が、浅薄な人気投票に墮すことを防ぐこ

とができます。その結果、国民はもっと深い政治認識に到達でき、徹底民主主義を実践できるだろうと、フロムは論じています（邦訳、242ページ）。

第4に、生存権保障の鍵として、「年間保証収入」という制度の導入をフロムは提案しています。小沢修司さんなどが紹介されている「ベーシックインカム」（あるいは「市民所得」）保障と同じ構想なのですが、すでに1955年出版の『正気の世界』の段階で提案していた慧眼さに驚きました

フロムは、こう書いています。この制度は、「人間は『社会への義務』を果たすかどうかにかかわらず、生きるための無条件の権利をもつ、という規範」のメッセージである。「ペットには認めながら、同じ人間には認めていない権利」の宣言となろう。「個人的自由の領域は、このような制度によって途方もなく拡大されるだろう。ほかの人間（たとえば親・夫・社長）に経済的に依存している人でも、もはや飢えの脅しに屈服することを強いられないし、天賦の才能を持っていて、違った人生を送る準備をしたいと思う人物も、しばらくある程度の貧しい生活を忍ぶ意志さえあれば、そうすることができる」ようになるだろうと（邦訳、251ページ）。

第5に、「持つというライフスタイル」を進んで放棄するための文化的・精神的・「宗教的」土台を築くことです。「自己および同胞の十全な成長を、生の至高の目的」とし、「自分がすべての生命と一体であることを知り、その結果、自然を征服し、……破壊するという目標を捨て、自然を理解し、自然と協力するように努める」ことを、フロムは強調しています。

そのためには何が必要か。近代人の間で自然観の革命を引き起こし、「神なき宗教性」に目覚めることが必要だとフロムは述べ、こう続けます。「宗派もなく、教義も制度もないヒューマニズム的『宗教性』、……仏陀からマルクスにいたる非有神論的『宗教性』」を培かっていく必要があると（邦訳、265ページ）。この指摘は、「唯物論的宗教性」の再生を訴える私の見地（『唯物論的アニミズムの世界観の構築』）と通底しています。

「在る」を重視するライフスタイルとは、動植物や微生物たちが、過去36億年をかけて築いてきた「自然界の掟」に順う生き方のこと。これにたいして、

「持つ」を重視するライフスタイルとは、過去1万年をかけて産業主義的な人間たちが築いてきた「人工的な掟」にすぎないし、人間社会にしか通用しません。

「持つ」を重視する文明の行き過ぎにたいする反動として、自然界の掟に学び、「より良く在る」（ウェルビーイング）を重視するライフスタイルの再興が叫ばれるようになってきました。まさに「自然順応型文明」、「エコエコノミー」への移行をめざす動きと同質の動きです。「正一反一合」、「否定の否定」を軸とする弁証法的な考え方が、いかに現代の世界を深部から突き動かしているかに気付いてほしいと思います。